



洋書輸入協会会報

Vol. 31 No. 6 (通巻361号) 1997年6月

BookExpo Americaに参加して

長い間 ABA Book Fair の名で親しまれて来た出版社と書店のための年に一度のお祭りが、今年から BookExpo America と改め、5月29日から6月2日までの3日間昨年、一昨年と同じアメリカ、イリノイ州のシカゴで開催された。ミシガン湖畔のこの都市は人口約270万人。ニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐアメリカで第3位の人口を抱える街である。歴史的には暗黒時代のマフィア、アル・カボネのイメージでとらえられ、恐ろしい都市を想像してしまうが、現在ではニューヨークなどに比べより新しく近代的で、デザイン的にも著名な建築家の作品が林立し、近代建築デザインを学ぶ者にとっては素晴らしい作品群であり、一般の我々にも感動を与えてくれる街である。他に我々を魅了するものに、ヨーロッパ印象派の作品を多数集めたシカゴ美術館、超高層ビルのシアーズタワー、ジョンハコックタワーからの眺望もある。一方、夜ともなれば人生を楽しむ各種レストラン、ジャズやブルースを楽しむクラブが人々の気持ちを暖かく包んでくれる、楽しい街である。又、シカゴはフランクフルトと並ぶ会議都市であり、年間を通じて多様なフェアが開催されている。

さて、我々洋販の一行はフェア前々日に現地に入り、フェア前日の午前にまず1社との市内のホテルでのミーティングをかわ切りに、フェア初日は市内のホテルで、2日目、3日目は会場であるマコーミック・プレイスの新南館での各社とのミーティングにのぞみ、合計40社との面会の機会を持った。

今回のフェアで気づいた点をいくつか拾ってみると、

①今まで慣れ親しんできた名称、ABA (American Booksellers Association) (正式には ABA Convention and Trade Exhibit) が、BookExpo America に改められたこと。これは、より“本”のフェアを印象づけるには良いネーミングだと思う。

②会場のマコーミック・プレイスは新しく、巨大な南館が新築され、ブースを持った約1,500社がワンフロアーに集まり、訪れた人々の動きを容易にした。空調もしっかりした快適な空間であった。

③Random House, Simon & Schuster, Penguin, HarperCollins といった大手出版社が7社ほど参加しなかったため大規模なブースが少なかった。これら大手出版社は、大手書店チェーンに対して独立系一般書店よりもよい取引条件を与えているということで、ABA から訴えられており、現在訴訟中のためフェアへの参加を中止しているとのこと。しかし、今回から名称も BookExpo America と変更されたのだから、年に一度のお祭りに参加しフェアを盛り上げてもらえればと思ったのは私ばかりではなかったようだ。

それらの出版社は、会場にはブースを持たなかったものの、我々海外からの得意先のために、各社ともインターナショナルのセールス担当者をシカゴに向け、市内のホテルにミーティングの会場を設けて話し合いの場を持って下さったことは先ほど述べた通りである。ある出版社は、ホテルでのミーティング会場を来年はニューヨークに設けてはと考えているようだったが、我々訪れる側にとっては、2つの都市に出向かねばな

目次

BookExpo Americaに参加して	1	海外ニュース	3	うちの会社	6
お知らせ	2	1997年総会懇親旅行	4	出版文化史逍遙—西から東—(1)	7
理事会報告	3	文化厚生委員会だより	5	広告	8

らないという非効率的な面があり賛成出来ないと思った。

④従来ほどの来場者がなかったこと。一部出版社からは、昨年比25%ほど少ないのではないかと、との声もあり皆落胆していた。推測出来る原因として、このフェアがシカゴで開催されるのが今年で連続して3年目であり、書店人からあきられたのではないかとということである。週末から開催される年に一度のこのお祭りで、会場でのビジネスもさることながら、それが終われば開催地での観光を家族と楽しむという喜びが、同じシカゴで3年目となると出びかえた人々が多かったのもうなづける気がする。主催者の Read Exhibition のメンバー、Association Expositions & Services 社がこの会場、McCormick Place での開催の長期契約を結んでおり、少なくともあと2年は同会場で開催されるようだ。来年からは、今まで以上に主催者の集客のための努力と企画が期待されることである。先程述べたホテルに特設会場を設けた出版社の他に、出展費用が高すぎて参加をあきらめた出版社、あるいは単なる経費的な面で

ホテルでの取引先とのミーティングを設営した出版社もあり、昨年のような混乱は解消されたものの主催者側としてはもう一つの検討課題が生まれたようである。

会場では多忙な中、顔なじみの出版社の方や見覚えのある沢山の方々に声をかけられたりかけたりしたが、つい先頃 Penguin Books の最高責任者の職を辞し、父上の起業になる Overlook Press の Publisher、ピーター・メイヤー氏の元気なお姿もお見かけした。

忙しい中にも充実した3日間はあっという間に終り、数々の宿題と成果をカバンにつめ、フェア終了の翌日帰途についた。短い一週間であった。

今回、出発前から楽しみにしていたことではあるが、某社のお招きで一夜存分に“Chicago Blues”をクラブで楽しませていただいたことである。会期中の一夜とはいえ、昼間の緊張から解き放され、本場のブルースを味わえたことは私のシカゴの思い出としていつまでも心に残るものと思う。

(洋販(株) 仕入グループ 村山正志)



お知らせ

◎北尾書籍貿易株式会社の代表者に下記の方が新たに就任されました。(1997年5月)

代表取締役社長 坂下幸雄

◎次の通り移転通知がありましたのでお知らせします。

西山洋書株式会社

新住所：〒104 東京都中央区銀座3-7-13

成田屋ビル3F

電話、Fax 共変更なし

理事会報告

6月11日(水)

(一)収支報告

4月及び5月分収支について総務委員長より報告があり承認した。

(二)委員会報告

1. 会費未払い会員につき事務局長の督促に対しても返事のない場合は最終的に理事長名でおこなうことが総務委員長より提案され承認した。(総務)
2. 会報の無料送付先を増やす件は経費増との関連もあり更に検討したい。
・今期(4月)より、会報2色刷りのピンクを薄緑に変更した。(会報)
3. Agent List 部分の整備の遅れにつき、大幅な経費増に繋がらない方法で効果的な改善を模索中。
(ダイレクトリー)
4. ピアパーティーの開催日を7月18日(金)とすることで再確認した。(文化厚生)

(三)定時総会報告

報告(案)について検討。特に問題ないので印刷して来週中に配布する。

(四)特別委員会答申についての理事会の取組

上記答申を受け今後の展開をどうするかについて、理事長より大要次のような見解が述べられた。

- ①協会活動としてではなく、メンバーの中での相互協力について研究し、実行する体制を作りたい。(例:協同物流)
- ②セミナー、研究会等のテーマを適時実施する。
(例:外為法の動向)
- ③消費税に関連して、外資系業者との競合問題について討議する場を設けたい。

(五)退会の承認

チャーチル・ジャパン(株)は日本での代表業務中止に伴い5月末日をもって、OECD 東京センターは広報部の活動方針の変更と協会担当であった水谷副所長の定年退職に伴い6月末日をもって、それぞれ協会を退会したいとの届けがあり承認した。

海外ニュース

情報産業企業の株価ランキング

MERRILL LYNCH 社のメディアアナリストは、

12の大手情報産業企業の税引前利益の評価をランクダウンさせた。就中、REED INTERNATIONAL、DORLING KINDERSLEY、及び PEARSON の3出版社が目立ち、更に DILLONS を保有する EMI GROUP と共に、そろって1997年の税引前利益が減少すると予測している。この予測は、1996年以降の情報産業における状況を分析した The Media Handbook によるものである。

PEARSON 社の場合、MERRILL LYNCH 社では税引前利益の評価は下げたものの、低額課税により一株あたりの所得試算については上げている。REED INTERNATIONAL のランクダウンの要因はポンド高によるものだ。DORLING KINDERSLEY 社および EMI 社の場合は、もっと根本的な要因——アメリカの音楽関連商品と書籍の需要低下による。DORLING KINDERSLEY 社では更に、CD-ROM 商品の開発に関する方針転換によるコスト、海外ビジネス開始にともなうコスト、そしてポンド高状況なども、短期的ではあるが不利にはたらいた。1997年の税引前利益は1,840万ポンドから1,070万ポンドへ、1998年では2,190万ポンドから1,600万ポンドへの減少を予測した。同社は CD-ROM 商品の売上が42%アップしたと報告し、MERRILL LYNCH 社もこれを「すばらしい長期的投資」だと評価している。

PEARSON 社の株主には忍耐が必要であるというのが MERRILL LYNCH 社の見解で、Chief Executive に就任した Marjorie Scardino は業務上の売却にしろ、グループ全体の営業戦略にしろ、何も打ち出していないが、マージンの上昇から見て PEARSON 社には潜在的な可能性がある。MERRILL LYNCH 社による税引前利益の予測は、1997年が3,090万ポンドから2,970万ポンドへ、1998年が3,810万ポンドから3,720万ポンドへと引き下げられた。

REED INTERNATIONAL 社の税引前利益の予測は、1997年で9,198万ポンドから8,953万ポンドに下げられたが、同社の株式の評価は良好だ。同社は「経営戦略、巨大な英語情報の蓄積、電子出版分野における成長などの点で、最高ランクにある情報産業グループ」という評価をいまだ保っている。しかしながら、アメリカでの著作権訴訟の評決などから判断して、MERRILL LYNCH 社は同社株の推薦の度合いを「買い」から「蓄積」へとランクダウンさせた。

【THE BOOKSELLER/MAY 30, 1997より】

1997年総会懇親旅行―箱根湯本

そこには例年ない和やかな空気があった。

それは一種の安堵感のようなものであろうか。

折り紙つきのエンターテナーである文化厚生委員・鶴さんの司会、関野委員長の挨拶が宴会の雰囲気の大いに盛り上げているのは例年通りであるにしても、何故か参加者の表情がいつもと少し違う、何かほっとした明るさがある。

そう、これは誰もが特別に意識をしてはいないが、先程終わった定時総会の内容が、大いに影響していると感じたのは私一人だろうか。

総会の冒頭、1996年度の会員入退会の発表が示す数字は入会ゼロ、退会15社。

協会設立56年にして倒産・廃業6社を含むこのような二桁の退会は、歴史的にみても1987年度の9社以来始めてだ。

しかも業界No.2の紀伊国屋の退会が会員に与えた失望と不安感は大い。

特別委員会が設けられ、協会の存続を前提とした討論が熱心になされ、答申案が理事会に提出されたことは誰もが知っている。しかし理事長の会報新年号ご挨拶に、一旦解散の議論も必要云々とあっただけで、何処か不安と緊張があれ以来多くの会員の胸に深く蟠っていたと言ったら大袈裟だろうか。

理事長のこの日のご挨拶は、しかし想像していたよりトーンが優しく、気張った箇所もなく、ゆるやかにしかも確固たる協会の存続と前進を示唆していた。

“氷解”という感情がこんなにも自然に、その後の懇親会を芯から明るく盛り上げた前例を私は知らない。

舞台が整い、お馴染みの演出家が宴会のスタートを合図すると、これはまた何とも華やいだ役者の登場となった。

これ程揃った美妓がずらりという景観は、飽きるほど宴会の経験をもつ文化厚生委員の剛の者(?)も余り知らないそうだ。多分一人の例外もなく美妓と呼べるおねーさんがた揃ったことで、理事長もその気になられたのかも知れない。

宴もたけなわとなると、素晴らしい美声のナウカの辻さんや丸善の中田さんに続いて、ご自身でもカラオケに挑戦されたのだ。

これは良かった。中々渋い味のある歌い方だ。

まあ、歌の巧拙などは問題外で、協会56年の歴史の中で理事長が懇親会に出席されることもむしろ珍しいとさえ言われているのに、歌の披露などは開關以来の出来事であったからだ。

種々、感心したり驚いたりしていると、なんだか内藤理事の一本締めで2時間の宴会はあっと言う間に終焉を迎えてしまった。

一旦自分の部屋に戻ったものの多少の物足りなさから部屋の仲間と一緒に二次会場(幹事の部屋)に赴くと、もう賑やかな歓声が廊下の外にも響いている。

先程ご自分の部屋に入り、もう休まれた筈の鈴木理事長もなんと、既に酩酊サークルに仲間入りされて盛にご歓談中ではないか。

従来、理事長が中々我々と一緒になってざっくばらんに話をしてくれないと、兎角の不満の声が出ていたものだが、もう大丈夫。きっとこの協会も良い方向に変わる事だろうと、安堵の声が後日出席の会員から沢山寄せられたことを報告したい。

2年に一度、役員選挙のない年には都心を離れた温泉場で総会と兼ねた旅行会をしようと決めてから、箱根・湯本での開催は今回で3度目になる。

何だか、年々参加者が減って行くようで、次の開催の在り方を検討したほうがなどと非公式な話も出たが、考えてみると会員数に占める出席者の比率は以前と余り変わっていない。

ただ残念だったのは、今回から関西を中心とした東京から遠隔地にある会員が少しでも参加し易いように配慮して、協会が交通費の半額を負担することを当該社にお知らせしたが、参加は皆無であったことである。

唐突なお知らせもさることながら、矢張り遠隔地から週日参加となると、実際には中々困難なことに違いない。

いずれ関西の会員にも会員であることのメリットを増す何らかの方策が、理事会や総務委員会で検討されることであろうが、近い将来東京以外の会員の方々が次々に参加される会の光景は、想像だけで終わらせてはならない。

さて、今回利用の河鹿荘についてだが、当初聞いた時は、荘という名称から民宿並を想像したが、どうしてどうして小田急線の湯本駅から国道一号線に沿って数分歩くと、湯元橋手前の左手に見える堂々たる立派なホテルだ。

創業者が元酒屋であったことからか酒もビールも近隣

のホテルよりも一本40円ほど安く提供してくれた。

各客室からは、裏手に早川の清流が静かに流れるのが見渡せるが、そのせせらぎの音に混じって、宿名のカジカ合奏が遠く近く聞こえたのかもしれないが、それを確かめる間もなく夜舟の客となってしまった。

ともあれ、翌朝は6時に起床、朝風呂に入って7時半に定められた朝食の場に行くと、流石、商売柄か、皆さん実にお行儀が良く、一人として二日酔い風情の人は見受けられない。

朝食が終わると、皆充分なる時間の余裕をもって、それぞれゴルフにテニスに箱根観光にと向かわれた。

今回の定時総会兼懇親会は欲を言って、もう少し参加

文化厚生委員会だより

フォーティラブ初夏合宿

1997年定時総会（既報）の翌日、5月17日にフォーティラブの初夏合宿は開催されました。折り悪しく雷雨もありうる天気予報（フォーティラブはこのケースが非常に多い）のため、幹事一同、心の中にてるてる坊主をぶら下げて、もし、予報どおりの天候になったら、総会に参加した宿泊組はまだしも、当日の早朝に駆けつける参加者にはどのようにお詫びをしたらいだろうかなどと当初は大変心配を募らせておりました。しかし、懇親会で杯を重ねるごとに、その心配も消えうせてしまい、二次会にては、もう片隅にも無くなってしまいました。

一夜明けた当日の朝の幹事の仕事は窓を開けて、天気の確認から。何とかもちような天候に、HBJの皆川さんと顔を見合せ「よかったですね。」とひと安心。当日参加の7名も無事到着し、昼食の1時間を挟んで、14名程で、大いにテニスを楽しんだ一日でした。途中、和田さん（大洋交易）、尾崎さん（エイビス）、坂本さん（絵本の家）の応援も入り、白熱したドローも見られました。初参加の力石さん（東京ブックランド）の強烈なサーブも最後は入り始めたのですが時間切れとなりました。天気予報に反して、少し日焼けして、顔が赤いまの帰路となりました。

土曜日の観光地とあって、湯本に出る道がいつも渋滞。抜け道を数回のUターンを繰り返して無事に小田原到着。（とても早く着いたので秘密です）

平野さん（医学書院 MYW）のご推薦の鰯館の店に行き、早めの夕食となりました。葦簾張りで夕日を遮り、

者があれば申し分なかったが、洋書輸入協会の前途に何か今までにない明るさが見えてきたと感じられた点は、大いなる収穫であったと言える。

洋書を取りまく新しい環境の変化に即応して行ける部分と、ゆるやかにして中々変わらない保守的な部分の混在の比率が、今後どう変化して行くのか――

そこには新しい理事長の指導を期待する芽生えの中で、会員各自が進めるこれからの洋書政策をして、確かに結実させる素材が、懇親会などを通じて得られるコミュニケーションの中にこそ、ふんだんに存在するのかも知れないと、渡辺理事の総会締めのご挨拶を反芻しながら、報告とします。（事務局・神田記）

植木の中を通ってくるそよ風の吹く二階にて、再度、談話の花がさいたということでした。

このようにフォーティラブの合宿は、テニスの腕前には関係なくどなたにも楽しめる催しです。次回は8月23日に津久井湖のプチピラで開催予定です。プールもありますのでご家族連れにても楽しめます。是非、今年度も多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

〔柴田記〕

第84会 72会 ゴルフコンペ

武蔵CC笹井コース 1997. 5. 29（木）

今回の武蔵CC笹井コースは日本出版貿易、中林さんのホームコースの一ツ間越練馬インターから圏央道、狭山日高ICを下りて2分でコースに到着とは余りの近さにびっくりしました。当日は新緑の映える美しい季節、ツツジの紅色がコースを一段とはなやかに引き立てて素晴らしいゴルフ日和でした。各コースは全て松林でセパレートされ全長6664ヤードと長く、フラットながらグリーンはかなりのアンジェレーションがあり、皆さんバターには泣かされた様でした。午前中のハーフ終了後の楽しみは何と云っても昼食会、中トロのさし身定食、ブタの角煮等々何をとっても絶品の料理に多少のアルコールをいただいて午後のプレイへと向いました。この難コースを制覇して優勝は丸善OBの三宅さん、愛用のドライバーを振りかざして手がたくまめました。2位は大洋交易の豊泉さん、アイアンとドライバーショットはプロ並みでした。

3位は常連の丸善OBの竹村さん、連チャンの疲れか

スコアは今1つでしたが3位はご立派。4位は日本出版貿易の初参加竹内昭雄氏、多少緊張された様子でしたがいつもニコニコ、今日のゴルフは楽しめた様です。5位は日本出版貿易の中林さん、フランス帰りで体調不十分乍らドライバーとアイアンショットはいつもの様に決まっていました。丸善の諏訪さんのウッドは当れば26

0ヤード、さすが野球で鍛えたスポーツマン。最後の上りミドル2ホールをパーで決め明日につなげるフィニッシュ。ゲーテの村山さん、2日前のスコアは45、48の好成績でしたが今回はパットが今一つ。この72会は84回中81回参加しますますお元気です。〔東亜ブック・鶴記〕

釣り同好会（キス釣り大会）

恒例の洋書輸入協会シロギス釣り大会が、6月7日（土）に前年と同じ茅ヶ崎で行われました。梅雨入り間近の時期でしたが、早朝より快晴、波おだやかな絶好の釣り日和になり、期待が持てそうです。前回より2名多い総勢17名の参加者全員が集合し、予定通りに茅ヶ崎港を出船し、港から約10分の近場の最初の釣場に到着し、船長さんの合図で一斉に釣り始めました。10分～15分後に周囲で釣れ始めましたが、私にはキス特有のあたりがなく、餌の取り替えに忙しく、さっぱり釣れません。周りを見回すと、私の後部席の昨年優勝された大洋交易の塚本さんが絶好調で釣り上げていましたが、他の参加者は、今一つ釣果に恵まれませんでした。船長さんもポイントを2回程度変えてくれましたが、終始「ぼちぼち」

の状態でした。大会最多優勝者の南江堂の若松さんも、苦戦を強いられる程でした。船中では、和気あいあい、談笑が聞こえ、穴子や飯ダコが釣れると一層笑いを誘っていました。3時に納竿し、船宿で表彰式が行われました。優勝は大洋交易の塚本さん19匹、準優勝は同じく大洋交易の中村さん11匹、第3位は洋販の今井さん9匹でした。今回は天候に恵まれ全員船酔いもなく、楽しい一日でした。久しぶりにOBの武田さん、月橋さんも参加され、大会を大いに盛り上げて戴きました。前回出席者の（株）丸善の方々（女性も含む）が仕事の都合で欠席されたのが残念です。最後に降船後に聞いた話ですが、茅ヶ崎周辺の海は赤潮になり釣果が少ないそうです。次回秋の大会に期待しましょう。

（株東亜ブック・内田記）

うちの会社

ペンギン・ブックス・ジャパン株式会社

英国ペンギン社の100%出資で法人化したのが5年前、まだまだヒヨコの会社です。とは言いながら、私の大先輩でビジネスの師匠でもある酒井忠男氏（現在当社相談役）が、英国の兄弟会社：ロングマン社との共同在日事務所を興してからかれこれ40年、丸善の「学燈」にペンギンの広告が初めて出してから約60年と、ペンギンは多くの方々に支えられながら、日本で長く生息して参りました。

当社の主な業務は、何と言ってもペンギン・グループ出版物の日本での販売促進活動、並びに顧客サー

ビスであります。これに加え法人化以降は、当社独自の出版他、英米のグループ会社と日本の企業各位との共同プロジェクトの企画・立案、コーディネート等を柱とし、新しい会社作りをしています。

現在非常勤も含めスタッフ13名、平均年齢33歳、ペンギン・グループ4万点の出版物に囲まれて、顧客各位に叱咤激励されながら、全員前向きに仕事をしています。本年7月初旬には、我が巨人軍の本拠地：東京ドームを仰ぎ見る、文京区後楽へ移転致します。ペンギン・ブックスは永遠に不滅です。（小野春夫）

英語辞書の歴史—ジョンソン・ウェブスター・OED—(8)

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆ウェブスター辞書の特徴(続き)

ウェブスターは10年の歳月を費やして語源の探究に取り組んだことをすでに述べたが、彼がこの辞書を制作する上で最も力を入れ、また辛苦を重ねたその研究の結実がどういう形で辞書に盛り込まれたのか、それを記しておくことにしよう。

言語が学問として確立したのは比較的新しく、19世紀の10年代であった。デンマークの言語学者 R. K. ラスクやドイツのグリム兄弟によるゲルマン語の研究結果が公刊されたのは1818年～1819年で、ウェブスターが辞書編纂を進めていたころは、語源に関して参照すべき文献がようやく現れだした、という時代であった。しかし、ウェブスターはジョンソン辞書の語源に対して否定的であったばかりではなく、当時の語源学の研究に対しても批判的で、彼は「ヨーロッパ随一の言語学者であるドイツ人の研究でさえも全く不完全なもの」と述べているのは、おそらくグリムの言語論を批判したものであったと思われる。そうしてウェブスターは、独自の研究によって得られた語源を辞書に収載した。しかし、その結果大変な酷評を被ることになり、シドニー・I・ランドウは「ひどい欠陥作品」とか「語源の多くは空想的な憶測に過ぎず、歴史的な好奇心以外には何の価値もない」(小島義郎他訳『辞書学のすべて』)などと厳しく論評している。こちこちのビューリタンであったことも影響して語源を聖書に求めたり、アラビア語とゲルマン語を関係づけたり、カルデア語(ウラルトゥ語)をヨーロッパとアジアの言語の祖としたりするなど、10年の研究もむなしく非科学的な語源論であった。

前の辞書『簡約英語辞典』の不評の原因となった改良スペリングは、今回の辞書で“examin”を“examine”としたように一部を伝統的な綴り字に戻した結果、“-ck→-c”(musick→music)、“-re→-er”(centre→center)、“-our→or”(honour→honor)、“-que→-(c)k”(masque→mask)、“-ise→-ize”(realise→realize)というようなスペリングが採録されることになり、これらの大部分は現在普通に使用されているアメリカ式(単語によっては英米共通の)綴り字になっている。

以上、ウェブスター『アメリカ大辞典』の特徴を簡単に紹介したが、こうして出版された辞書は2 Vols. セット20ドルという高額のせいもあって売行きは芳しくなかった。しかし、辞書としては内外から大変な好評をもって迎えられ、特にイギリスで歓迎され、ドイツでは高く評価された。イギリスでは商業的にも成功したようで、初版2,500部はたちまち売り切れ、続いてイギリスの出版社から3,000部出版されたという(リチャード・M・ロリンズ『ウェブスター 辞書の思想』)。そして、アメリカでの発行元「コンヴァース社」が倒産して辞書が絶版になったときには、このイギリス版がアメリカに輸入されて販売されたということであった。なお、「コンヴァース社」は発行を受託したもので、費用を負担したのはウェブスターで、いわば私家版というような形の発行であった。

徐々にではあるが、アメリカでもこの辞書の声価が高まってきたものの、相変わらず売行きが低調なのは大冊であったことと高価であったことによると考えたウェブスターは、縮刷版の発行を計画した。その編集はウェブスターの女婿チャーンシー・A・グッドリッチ(Chauncy Allen Goodrich 1790-1860)の指揮の下にジョセフ・E・ウスター(Joseph Emerson Worcester 1784-1865)が担当したが、彼はそれまでにジョンソンの辞書の簡略版の編集を手がけており、辞書編集についてはすでに経験者であった。この辞書は1829年に出版され、低廉なこともあり、またウスターの卓抜した編集能力によって成功を収めたのであったが、この編集によってウスターとウェブスターの間に感情の齟齬が生まれた。これがアメリカの辞書史を賑わした有名な「辞書戦争」へとつながって行ったのであった。

ともあれ、この簡略版は親辞書の定義を縮め引用例文と語源を大部分省略しながら、ジョンソン=トッド版辞書から見出し語を借用して、親版よりも収録語彙数を増加させた。そういうこともあって広く好評を得て版を重ねた。〔参照図書:ランドウ著・小島義郎他訳『辞書学のすべて』/稲村松雄『青表紙の奇蹟』/ロリンズ著・瀧田佳子訳『ウェブスター 辞書の思想』〕

重要研究論文選集

偉大な政治思想家たち

～プラトンからヒュームまで～

全10巻21冊 set ISBN 1 85098 096 8

1997年11月入荷予定

揃予価 781,660円(税別)

GREAT POLITICAL THINKERS

Editors:

John Dunn,

Fellow, King's College, and Professor of Political Theory, University of Cambridge, UK

Ian Harris,

Department of Politics, University of Leicester, UK

本シリーズの特色

- ◆10人の大思想家(プラトン/アリストテレス/アウグスティヌス/トマス・アクィナス/マキャヴェリ/トマス・モア/グロティウス/ホッブズ/ロック/ヒューム)に関する古今の重要研究論文540篇を集成、発表年代順(1827～1995)に配列。
- ◆特定学派や一時的流行にとらわれず、永続的価値をもつ業績を厳選。類書との重複を避けつつ、学術雑誌はもとより、講義録・パンフレット・新聞や、著書の一部までを広く再録の対象とする。
- ◆重要性に鑑み、一部の論文は原語(独・仏・伊)で収録。
- ◆政治思想の起源と発展、過去の主導的思想家がそこに果たした役割を理解するために欠かせない文献。

EE Edward Elgar Publishing Ltd.

日本総代理店 ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-9 研究社ビル 電話(03)3291-4541(代表)

1997年6月

通巻第361号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03)3271-6901 FAX (03)3271-6920

印刷所=藤本総合印刷株式会社